

編集後記

研究会の開催回数が、

この一〇月で五〇回に

達した。「もう五〇回」か、それと

も「まだ五〇回」か……。果たして、

いつまで続くのか。研究会の呼びか

け人は「おもしろいな、と思えるう

ちはつづけましょう」といつている。

この曖昧さ加減、太平記ヨミの研究

者らしく軍師だ。はて、この会の魅

力は何か？ ちよつと考えてみた。

迂闊にも、改めて研究会について

考えて驚いたのは、この会には「会

員」がないことだ。会則も会費も

なにもない。出入り自由。当日名前

を書くだけ。なのに（だからか？）

盛会なのだ。定位置に座る常連はい

るが、誰がきてもよい。なんだかが

ード下の居酒屋みたいだ……。おっ

と、アゴラに訂正しておこう。

実際、毎回のように、新しい参加

者が足を運んでくるのは楽しみの一

つだ。研究会では必ず出席者全員に

自己紹介を求めるので、いつも新鮮

な風が吹いている。研究分野・専門

を越えた未知の人に会えるのは、

書物を対象とする研究会だからなの

だろう。本号にも、初登場となる方

の論考が二本収録されている。

それから、興味深い報告もさるこ

とながら、エンドレスな質疑応答。

「どこからでも」という司会進行。

変化球、直球、なんでもありの、バ

リア自由な質疑が投げかけられる。

「最後にどっしりでも質問のある方」。

フツーはこれは締め合図だ。が、

この会では、たいてい「どーしても」

という方が何人か出、延長戦に突入

する。怖いのは自分もその一人にな

ってしまふことだ。（長いな。まだ

やるのか……。）と思つたりもする。

しかし、他の研究会で質疑応答が短

くあっさり終わると、（なーんだ。

たいしたことないぜ）と拍子抜けし

て、物足りない。なぜだ？

研究会は毎月のようにやっている

が、隔月となることがある。すると、

半年ぶりぐらいの感じで、参加者た

ちがなつかしくなるのが奇妙だ。

例えば、小生が懇親会でエスプリ

とウイットを効かせたハイブローな

ギャク（カタカナが多いな）を連発

しているのに、いつさい笑わず、「お

やじー」と鋭い眼光で睨みつける「読

書熱」。白河の関を越えてやってくる

ご意見番、「オレたちひょうきん

族」ならぬ「転勤族」。これらの猛

者連を操り梓行してしまう金八先生

に似た編集者。石碑の拓本を「ナノ」

まで採るツボの手をもつ男。時折来

ては大きな地声で強烈な印象を残す

「グワシ」椋図を愛する越後人……。

結局、うまく言葉にできない会の

魅力。これを宣長に問うてみれば、

「それすなわち不思議にあらずや」。

あ、それかも。この不思議な魅力が

たまらなくいい。（小川記）